

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第65集

国分寺・国府台遺跡

磐 田 市

令和3・4年度磐田南高等学校老朽化対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 2 2

静岡県埋蔵文化財センター

序

国分寺・国府台遺跡は静岡県磐田市にある遺跡で、その中に特別史跡遠江国分寺跡を含んでいます。その北側に隣接する県立磐田南高校は、大正11年に現在の場所に建てられた伝統のある学校です。

平成6年度、県教育委員会が同高校の整備方針を検討するために、校内で埋蔵文化財の確認調査を行った結果、遠江国分寺の寺域が、特別史跡の指定範囲を超えて現在の校舎が建っている場所まで広がっていることが判明しました。

それ以来、県教育委員会、磐田南高校、高校同窓会・後援会をはじめとする学校関係者、地元磐田市関係部局、市教育委員会などの関係者が多方面にわたって、高校整備と埋蔵文化財保護の両立を図るための調整を続けてきました。

その調整は困難を極め、高校整備と埋蔵文化財保護の両立を図る基本方針に関係機関の同意が得られたのは、確認調査から20年以上たった平成29年のことでした。

今回の発掘調査は小規模なものでしたが、この発掘調査に至るまで、多くの方々の長きにわたる御尽力があったことを改めて思い起こしたいと思います。

今年、磐田南高校は創立100周年を迎えるうかがっています。そして今、発掘調査をした場所では、新しい校舎の建設が進められています。

創立100周年の節目に、同高校の整備と埋蔵文化財保護のあり方は次の段階に移ったと言つてよいと思います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、静岡県教育委員会、磐田南高等学校、磐田市教育委員会をはじめ、各関係機関の御理解と御協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2022年11月

静岡県埋蔵文化財センター所長
深井 善一郎

例　　言

- 1 本書は、磐田市見付に所在する国分寺・国府台遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 国分寺・国府台遺跡の調査次数は、磐田市教育委員会が管理しており、本調査は第193次に当たる。
- 3 調査は、磐田南高等学校老朽化対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、静岡県教育委員会の依頼を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 本調査の期間及び面積は次のとおりである。
現地調査：令和3年8月～10月　調査対象面積91m²　資料整理：令和4年7月～令和5年2月
- 5 調査体制は次のとおりである。
令和3年度
所長　野村浩司　次長兼総務課長　吉田光廣　技監兼調査課長　中鉢賢治　総務班長　島田真紀
調査課長代理兼調査班長・調査担当　富樫孝志
令和4年度
所長　深井善一郎　次長兼総務課長　鈴木良二　技監兼調査課長　中鉢賢治　総務班長　島田真紀
調査課長代理兼調査班長・調査担当　富樫孝志
- 6 本書の執筆は富樫孝志が行い、本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。
- 7 発掘調査における業務委託は次のとおりである。
発掘調査等支援業務委託　株式会社沖開発（令和3年度）
整理作業・保存処理業務委託　株式会社イビソク（令和4年度）
- 8 発掘調査では、次の方々から御指導、御教示をいただいた。厚くお礼申し上げる。
安藤寛　大村至広　鈴木康大　竹内直文　谷口安曇　平野吾郎　渡邊武文（五十音順、敬称略）

凡　　例

- 1 調査位置を示す座標は、平面直角座標第VIII系（世界測地系）を使用した。
- 2 本文中の周辺の遺跡分布（第2図）は、国土地理院発行の電子地形図25000を使用した。
- 3 造構略号は、次の通りである。 SD：溝跡　SP：柱穴

目　　次

序	例言	凡例	目次
第1章	調査に至る経緯	1
第2章	遺跡の周辺環境		
第1節	地理的環境	3
第2節	歴史的環境	3
第3章	発掘調査の方法と経過		
第1節	現地調査	7
第2節	資料調査	7
第4章	調査の成果		
第1節	地形と土層	9
第2節	検出遺構と出土遺物	10
第5章	まとめ	12
写真図版	抄録		

第1章 調査に至る経緯

県立磐田南高等学校の前身である県立磐田見付中学校は、1922年（大正11年）に現在の場所（磐田市見付3084）に建てられた。学校敷地の南側には隣接して遠江国分寺跡がある。磐田南高校が建った翌年の1923年（大正12年）に史跡に指定され、1952年（昭和27年）には特別史跡に指定された。

磐田南高校の構内は指定範囲には入っていないが、学校施設の改修等のために行われた発掘調査では、次のとおり遠江国分寺跡との関連が考えられる遺構の発見が相次いだ（第1図）。

第5次調査（1983年）：3間×8間以上の規模を持つ掘立柱建物跡を検出。

第44次調査（1988年）：掘立柱建物跡を2棟検出。

第51次調査（1988年）：東西方向で平行する2本の溝を検出。擾乱と報告されたが、現在では、112次調査（1994年）で検出された南北方向の築地塀跡とつながる東西方向の築地塀跡と考えられている。

第52次調査（1988年）：二面庇を持つ9間×3間の掘立柱建物跡を検出。

第101次調査（1993年）：第44次調査で検出した掘立柱建物跡の続きを検出。4間×2間以上の規模であることが判明。

第112次調査（1994年）：南北方向の築地塀跡を検出。第51次調査で検出した東西方向の遺構が、これとつながる築地塀跡であったと判断され、これによって遠江国分寺跡の寺域を区画する築地塀跡が、磐田南高校の構内まで延びていることが判明。

1994年の第112次調査によって、校内の一部が寺域に含まれることが明らかになった。この時、校舎の建て替えの問題が持ち上がった。校舎の中には1962年（昭和37年）に建設されたものがあり、新校舎への建て替えが懸案事項となっていた。県教育委員会では、校内の文化財保護と校舎建て替えの両立を図るために協議を続けたが、調整は難航を極めた。

平成26年度、静岡県は静岡県公共施設等総合管理計画を策定し、これに基づいて県教育委員会は平成29年度、静岡県学校施設個別施設計画を策定した。この計画では、県立学校施設の建て替えと改修工事によって、施設の長寿化を推進することが基本方針とされ、磐田南高校の校舎2棟（管理教室棟、特別教室棟）は、最優先で対応が必要な「第1グループ」21棟の中に位置付けられた。

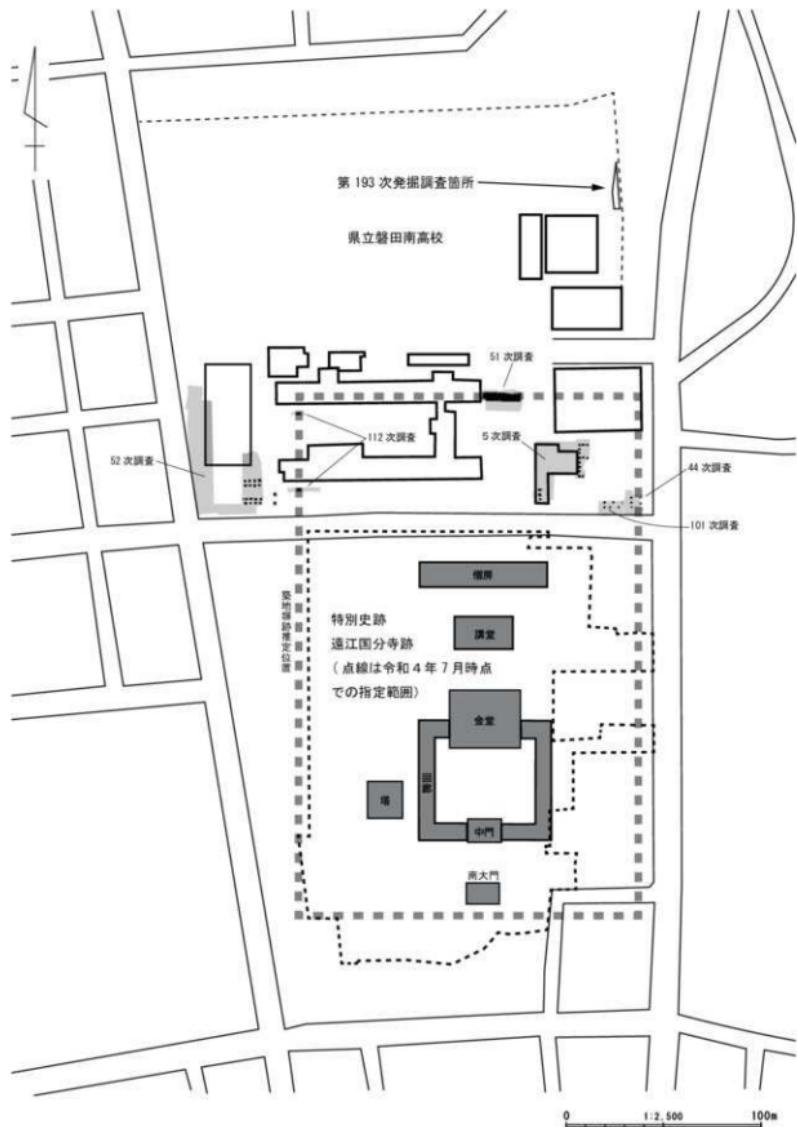
このことを受けて県教育委員会の文化財保護課（現スポーツ・文化観光部文化財課）と財務課（現教育施設課）は、平成29年度、高校構内の文化財保護と校舎建て替えの基本方針を年度内に定めるよう協議を開始した。協議の焦点は、新校舎の建設場所の決定に絞られた。現校舎の下には築地塀跡が通っており、校舎の基礎部分以外では築地塀跡が残っている可能性が考えられた。そのため、現校舎を取り壊して同じ場所に新校舎を建てるとは、適切ではないと考えられた。そこで、築地塀跡の外側にあたるグラウンド部分が新校舎建設地の候補とされた。しかし、グラウンド下の文化財の残存状況が不明であったため、県教育委員会と磐田南高校の調整により、平成29年12月の冬休み中にグラウンドで確認調査を実施することとした。

12月22、23、25～28日の6日間に渡ってグラウンドで確認調査を実施した結果、一部を除いて文化財は存在しないことが明らかになった。

この結果を受けて県教育委員会は、構内南半分では、校舎等の施設を取り壊した後、遺構を保護するための盛り土を行ってグラウンドとして整備し、構内北半分に新校舎を建設する基本方針を決定した。

令和元年、県教育委員会は校内の北東隅に新校舎を建設する計画を立てたが、一部に文化財が残っている可能性が考えられたため、県文化財課が確認調査を行った。その結果、遺物包含層と時期不詳の溝を検出した。この取り扱いについて県文化財課は、記録保存の判断をし、今回の発掘調査に至った。

第1章 演習に至る経緯



第1図 遠江国分寺跡の推定範囲と磐田南高校構内での主要な発掘調査

第2章 遺跡の周辺環境

第1節 地理的環境

国分寺・国府台遺跡は、静岡県西部の磐田市と袋井市にまたがる磐田原台地の南端に所在する。磐田原台地は更新世に土地が隆起してできた台地で、南北約11km、東西幅は、台地南端で約5kmの細長い三角形を呈している。北端は標高約130mで、南に行くに従って標高が低くなり、現在の東海道新幹線が通っている辺り、標高2.5m程のところで沖積地の下に没している。

台地上は、台地北端から南下する南北方向の河川によって削られ、無数の深い谷が形成されている。最も大きな谷は、磐田市今之浦を通る谷で、磐田原台地を東西に二分している（第3図）。今之浦には、縄文海進の際に海が侵入し、海退後も中世までは潟湖（ラグーン）が残っていた。潟湖消滅後は、砂泥が堆積して低湿地となった。

国分寺・国府台遺跡は、磐田原台地の標高16m～21m程の場所にある。遺跡の東側には、南北方向に延びる今之浦の谷があり、台地上とは17m程の比高差がある。国分寺・国府台遺跡は、この谷を望む場所にある（第3図）。

第2節 歴史的環境

磐田原台地は旧石器時代遺跡の多い台地で、国分寺・国府台遺跡でも発見されている（磐田市埋蔵文化財センター1996、以下「市センター」とする）。縄文時代の遺跡は、磐田原台地上の中半場遺跡（市センター1995）や新豊院山遺跡C地点（市センター2005）で中期の遺物が出土している。後期になると、磐田原台地の東側～南側に広がっていた潟湖が生活圏に取り込まれたと見られ、台地南部に西貝塚遺跡（麻生ほか1961）や見性寺貝塚（遠江考古学研究会1974）などが見られる。

弥生時代になると、磐田原台地南側の低湿地が、本格的に生活圏に取り込まれるようになり、鎌田・鎌影遺跡（市センター1987）や御殿・二之宮遺跡（磐田市教育委員会1981）などの集落が形成された。古墳時代には、磐田原台地上に700基を越える古墳が築かれた。

奈良時代になると、遠江国分寺が築かれ、御殿・二之宮遺跡の中には遠江国府が置かれたとされている（市センター1994ほか）。ここでは、国司館の可能性がある掘立柱建物跡が検出された他、「綾生」「豊穀」「敢石部」といった官名を記したと思われる墨書き器、『和名抄』に遠江国の地名として記された「大郷」「狹東郷」「久米郷」が書かれた木簡などが出土した。

平安時代には、国府が現在の見付に移動したとされている（市センター1993）。見付端城遺跡の下層から平安時代の掘立柱建物跡が検出され、縄釉陶器や白磁、円面鏡、瓦搭などが出土し、見付国府跡の可能性を考えられている。

見付には、中世にも国府が置かれた。遠江国分尼寺跡から、鎌倉時代の土坑墓が検出され、青磁や白磁などが出土し、見付国府の有力者の墓と考えられている（市センター2003）。

戦国時代には、徳川家康が御殿・二之宮遺跡の中に中泉御殿を築造し、宿泊や鷹狩の際の拠点とした。

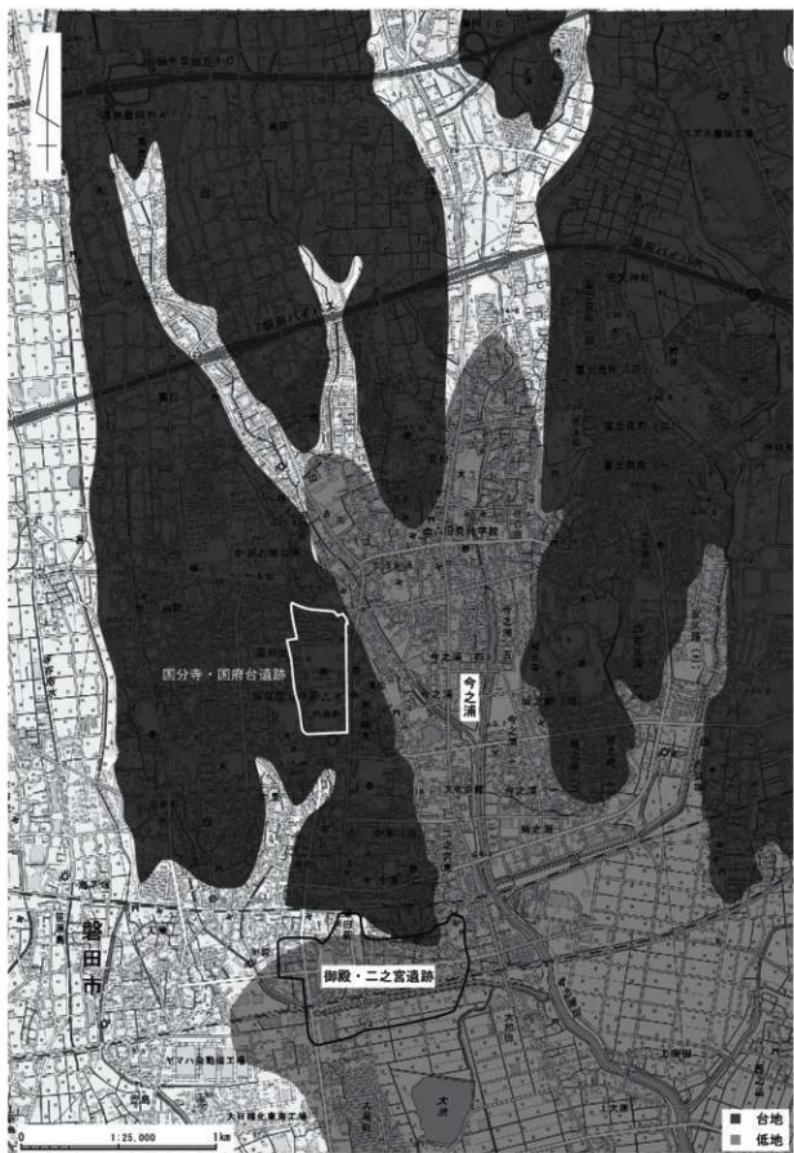
見付は、近世も宿場町として繁栄した一方、中泉御殿に隣接して中泉陣屋が置かれ、遠江の天領を管轄した。

最後に、国分寺・国府台遺跡の名称にある「国府台」の由来について記す。これは字名であるが、昭和39年～40年、遠江国分寺跡の北側にある国分尼寺跡の発掘調査が行われた。その際、国分尼寺が国分寺よりも高い場所にあるはずではなく、国府跡ではないかと考えられ、それが字名になったものである。

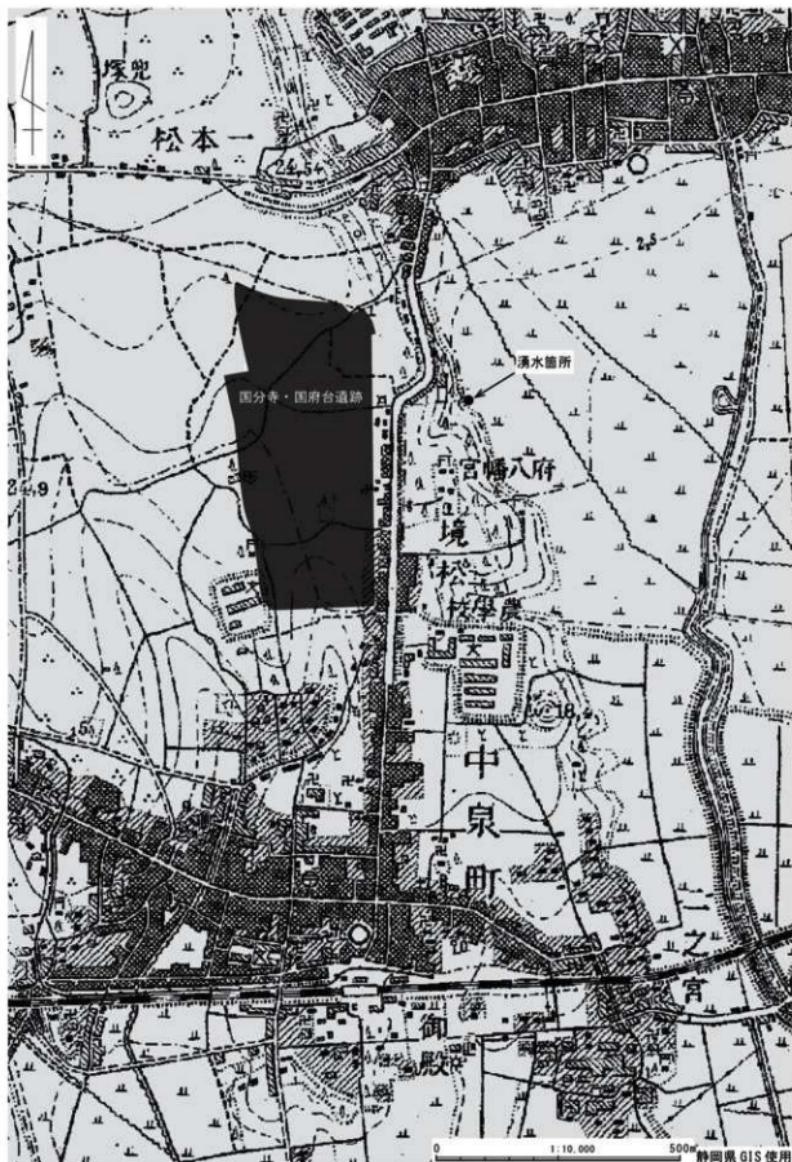


1. 国分寺・国府台遺跡
2. 特別史跡遠江国分寺跡
3. 太宝院廃寺
4. 御殿二之宮遺跡
5. 西貝塚遺跡
6. 西貝塚南遺跡
7. 野原遺跡
8. 東貝塚遺跡
9. 堂山古墳群
10. 安久路古墳群
11. 城之堀A古墳群
12. 城之堀B古墳群
13. 城之堀1丁目遺跡
14. 城之堀西山遺跡
15. 石原貝塚
16. 庚申塚古墳
17. 澄水山古墳
18. 丸山古墳
19. 御林遺跡
20. 一宮南原I遺跡
21. 一宮南原II遺跡
22. 土器塚古墳
23. かぶと塚古墳
24. 京見塚古墳群
25. 府八幡宮内遺跡
26. 福王子境内遺跡
27. 城之堀城跡
28. 見性寺遺跡
29. 新通り遺跡
30. 塔の段経塚
31. 見付塚城
32. 大善坊遺跡
33. 住吉遺跡
34. 一宮I遺跡
35. 一宮II遺跡
36. 加茂東原I遺跡
37. 加茂東原II遺跡
38. 加茂東原III遺跡
39. 加茂東原IV遺跡
40. 一の谷中世塚古墳群
41. 河原遺跡
42. 富丘古墳群
43. 東原V遺跡
44. 東原VI遺跡
45. 東原VII遺跡
46. 広野遺跡
47. 広野B古墳
48. 広野C古墳
49. 高梨屋敷遺跡

第2図 周辺の遺跡分布



第3図 周辺の旧地形



第4図 国分寺・国府台遺跡周辺の古地図

第3章 発掘調査の方法と経過

第1節 現地調査

国分寺・国府台遺跡の範囲内で行われる確認調査、工事立会、本発掘調査は、磐田市教育委員会がすべて通し番号で調査次数を付け、各調査箇所を平面直角座標により把握、そのデータを管理している。今回の調査は第193次調査に当たる。

調査箇所は、令和元年度に県文化財課が行った確認調査で、遺物包含層と遺構が確認された場所を中心に、新校舎建設の影響を受ける範囲、91m²である。

発掘担当者は静岡県埋蔵文化財センターの職員とし、調査全体の計画と掘削等業務、遺跡測量等業務の委託業者との調整、現地調査での判断、遺跡の評価を行った。掘削等業務と基礎整理解作業、仮設工、水準点測量、基準点測量、空中写真測量、遺構個別測量、景観写真撮影等は、発掘調査支援業務として民間に委託して実施した。

調査は校内で平日に行なったため、重機や現地事務所等の搬出入や発掘調査中の騒音が、授業や部活動等の支障にならないよう、また、生徒が発掘調査区に入り事故が起ることのないよう、学校側と入念に調整するとともに、教員、生徒への周知をお願いした。

調査した場所は旧テニスコートで、調査当時は使われておらず、通常、学校関係者が立ち入る場所ではなかったが、近隣で体育の授業や部活動が行われていたため、安全管理に配慮した。

現地事務所の設置、重機等の搬入が完了した後、令和3年9月1日から表土除去を開始した。天候の悪化などで作業が滞ったが、7日には表土除去を完了した。8日から包含層掘削を開始したが、包含層が非常に硬く、作業は難航した。13日には、1982年度に当地で磐田市教育委員会が行った確認調査（第4次調査）のトレレンチ跡と、當時発見された溝跡も検出した。

17日に包含層掘削が終了し、遺構検出を開始した。同日中に上記の溝跡の他に土坑と谷状の落ち込みを検出し、直ちに掘削を開始した。27日には遺構掘削を終了した。28日に全体を清掃し、遺構個別写真を撮影した。その後、足場を組んで、6×7判の白黒フィルムとデジタル一眼レフカメラを使用して全体写真を撮影した。さらに高所作業車を使用して、景観を含めた全体写真を撮影した。

29日には、ドローンを使用して写真測量と景観写真撮影を行い、その後、遺構の個別実測を行った。

30日、調査区を埋め戻し、現地事務所を撤去し、現地調査を終了した。

第2節 資料調査

資料調査は、令和4年度に実施した。当センター職員1名が担当となり、全体の計画と資料整理・保存処理を委託した業者との調整、監督業務、資料調査における判断、成果の評価、報告書原稿の作成等を行った。遺物の実測、トレース、版組、遺構図面のトレース、版組、遺物写真撮影と写真的版組等の作業は、整理作業・保存処理業務として民間に委託した。

出土品については、分類・仕分けから開始した。当初から接合する見込みのある遺物がなく、復原を要する遺物もなかったため、すぐに実測を行い、パソコンの描画ソフトを使用して実測図をトレースするとともに、センターの写真スタジオで出土品の写真撮影を行った。

記録類については、現地で作成した図面の編集から開始した。編集しながら版組を行い、版組終了後、パソコンの描画ソフトを使用してトレースをした。

現地写真、出土品写真とともに、デジタル一眼レフカメラで撮影した写真是、すべて18%グレーを基準

とした色補正を行った。

出土品と記録類のトレース終了後、図面、写真等とセンター職員が作成した原稿を、パソコンの編集ソフトを使用してレイアウトする編集作業を行った。

報告書の印刷と配布は民間に委託した。



表土等除去の状況



遺構検出の状況



ドローンを使用した景観写真撮影



記録類編集作業の状況



出土品実測の状況



出土品写真撮影の状況

第4章 調査の成果

第1節 地形と土層

1 地形

国分寺・国府台遺跡は、磐田原台地を東西に二分する今之浦の谷を望む丘陵上にある。地形は、南に向かって緩やかに傾斜しているが、平坦に近いといって良い（第4図）。ただ、広い平坦地ではない。遺跡のすぐ南側と西側にはそれぞれ谷が入っていることから、今之浦の谷を望む狭い平坦地に立地していることになる。

調査区のすぐ東に県道56号が通っており、一部短絡路が作られているが、旧東海道をほぼトレースするように作られている。この県道56号と高校敷地の間には10m近い比高差があり、高校からは台地の東側を一望できる。この段差は、台地東側にある今之浦の谷に至る斜面の一部となっている。

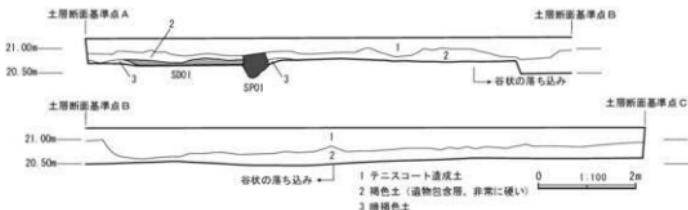
磐田原台地は、表層水が地下に浸み込まない地質のため、地下水に恵まれず、生活水の確保が困難な場所である。国分寺・国府台遺跡で、古代の井戸跡は発見されていないが、台地と低地の境界付近には湧水地点があり、第4図に示した場所にも近年まで湧水があり、生活水として利用されていた。国分寺・国府台遺跡に居住した人々も、このような湧水を利用していたと考えられる。

2 土層

磐田原台地は全体的に、旧石器時代以降の土層の堆積状況は良好ではない。近隣に堆積物を供給する火山がなく、風成堆積物が主体になっていることが大きな要因である。国分寺・国府台遺跡も同様で、現地表下50cm程で遺物包含層が現れ、1m弱で遺構面に達する場所が多い。

当地は、テニスコートを整備する際に土地を削平した上に造成土を盛ってある（第5図の第1層）。厚さ50cm程の造成土を除去すると、遺物包含層が現れる（第5図の第2層）。この層は非常に硬く締まっている。1982年、テニスコートが作られる前に磐田市教育委員会が実施した第4次調査でもこの層は確認されている。当時の記録でも、この土層には「かなりかたい」との注記が見られる。このことから、テニスコートを整備する際の転圧で硬く締まったのではなく、当初から硬い土層であったと判断できる。遺物は、奈良時代～中世の瓦、土器、陶器などが混在している。このことから、この地層は中世以降に形成された耕作土の可能性を考えられる。

2層の下には、調査区の一部で暗褐色土の3層が確認できた。遺物が出土しなかつたため、土層の形成時期は不明である。1982年の第4次調査でも、この土層に当たると思われる土層が検出されているが、時期は特定されていない。



第5図 基本土層と谷状の落ち込み断面図

第2節 検出遺構と出土遺物

遺物包含層を除去したところで、溝跡1本、土坑1基、谷状の落ち込み1箇所を検出した（第6図）。

1 溝跡（SD01）

1982年の第4次調査で検出された遺構である。東西方向に伸びると思われる溝で、幅は2.4m～3.2m、検出面から底面までの深さは20cm程度である。本来の掘り込み面は失われた可能性が高い。

埋土は、検出面の上に堆積した遺物包含層（褐色土）と酷似している。

今回の調査では遺物が出土しなかったが、第4次調査で、この溝跡から奈良時代の瓦が出土した記録があることから、この溝跡の時期は奈良時代と考えることができる。

この溝跡の東側は、今之浦の谷に向かう斜面になっているため、東側には続かないと思われる。一方、西側は、学校のグラウンドの方に伸びていると思われるが、これよりも西側では遺構自体が確認されていないため、この溝の続きも不明である。

なお、この溝は1889年（明治22年）に作成された公団の地図とは一致しない。

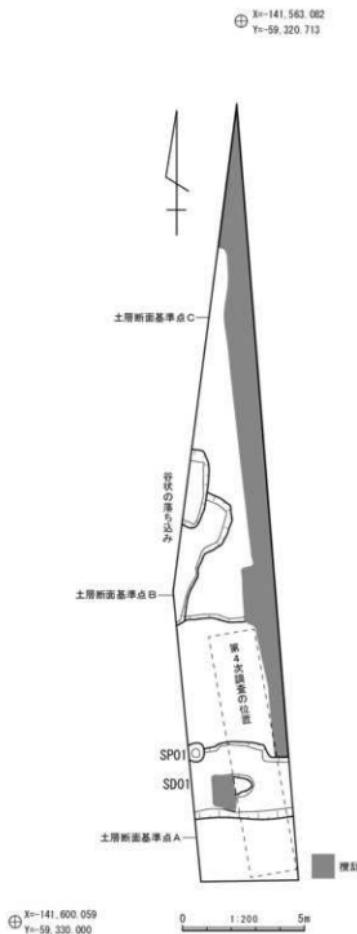
2 柱穴（SP01）

調査区の西側の壁際で検出した円形の遺構である。直径は76cm、検出面からの深さは50cmである。断面を観察したところ、遺物包含層の上から掘り込んであることが判明したが、本来の掘り込み面は、テニスコート造成時に失われていた。したがって、本来の深さは80cm以上あったと推定される。

埋土は、1層は淡褐色土で、遺物包含層の褐色土よりもわずかに色が薄い程度で、遺物包含層と酷似している。2層以下は、1層とは色調が大きく異なる。3層～7層は黒褐色土を基調としており、地山の黄褐色土の含有量で分けた。黒褐色土と地山の黄褐色土を異なる比率で混合した土を入れていると考えられる。

3層～5層は次第に黄褐色土の量が多くなっていくのに対して、5層～7層では減っていく傾向がある。3層～7層は非常に硬く縮まっていて、水平堆積に近いことから、人為的に土を入れて叩き締めたと考えられる。8層は柱を抜き取った後に堆積した土で、3層～7層に比べて、やや灰色がかったり。

柱を抜き取った痕跡があることから、この土坑は孤立柱建物の柱穴と考えるのが妥当である。遺物が出土しなかつたため、時期の特定は困難である。奈良時代～中世の遺物包含層を切っていることから、中世以降



第6図 調査区平面図

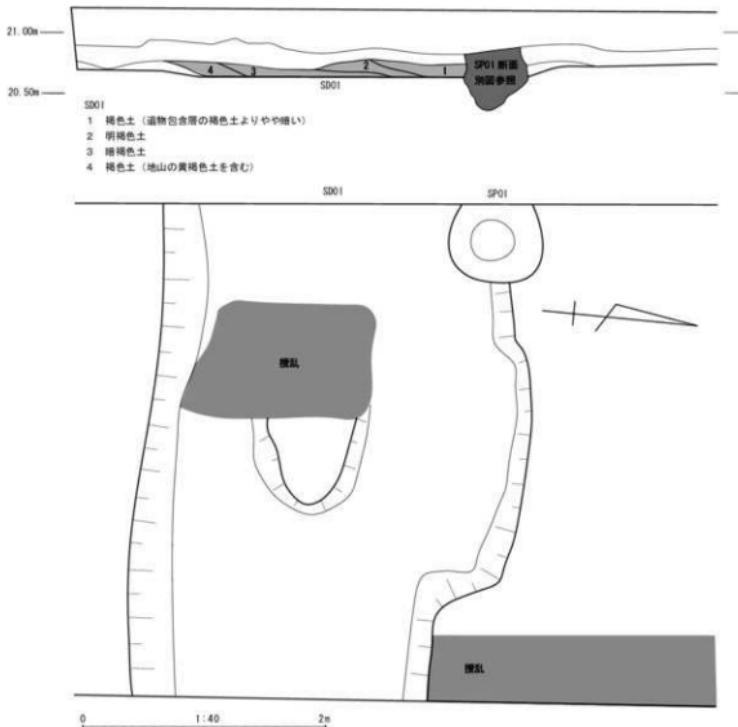
の柱穴と考えられる。これと組み合う柱穴は検出できなかった。

国分寺・国府台遺跡の主体は奈良時代～平安時代で、鎌倉時代以降の遺構は少なく、特に中世以降の掘立柱建物跡の類例は、御殿・二之宮遺跡の第122次調査（市センター2014）で報告されている。これは掘立柱建物跡1（SB01）とされた遺構である。この柱穴では、褐色系の土と黄褐色系の土が互層になっている状況が見られる。時期は、大窯2期（藤澤2005）に当たる陶器が出土したことから、16世紀半ば～後半と考えられている。

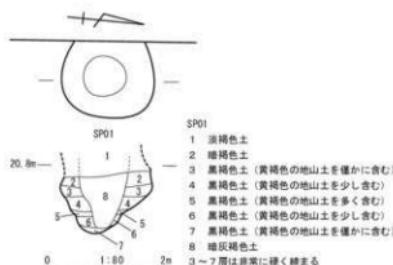
SP01もこれと同様の掘立柱建物を構成していた可能性が考えられる。東に今之浦の谷を望み、眼下に旧東海道を見下ろす立地にあることから、当地に掘立柱建物が作られていた可能性は十分に考えられる。

3 谷状の落ち込み

平面図は第6図、断面図は第5図に示した。地山の黄褐色土を掘り込んでいる。全体的に浅く、最も深い部分でも、検出面から40cm程度である。3段に渡って掘り込んだようになっており、3段目は土坑状の落ち込みになっている。性格は不明で、平面形が不整形であることから、自然地形の可能性もある。



第7図 溝跡SD01の平・断面図

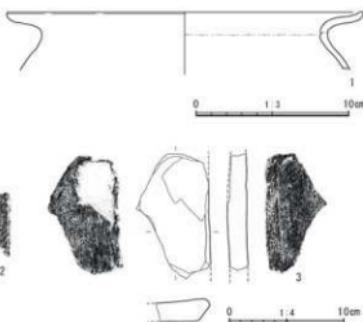


第8図 土坑SP01の平・断面図

4 出土遺物

遺物包含層から、須恵器、土器類、瓦などが出土したが、図化できた遺物は少ない。

1は、甕の口縁の破片である。口縁部の傾きから、奈良時代に入ると思われる。2、3は平瓦で、いずれも布目と撚組の圧痕がある。



第9図 出土遺物実測図

第5章まとめ

今回の調査地点は、遠江国分寺跡と国分尼寺跡の間に当っている。この辺りは、土地が削平されている部分が多いこともあって、遺跡の状況については不明なことが多かった。今回の調査で、奈良時代の構と中世以降の可能性がある掘立柱建物跡の柱穴を検出したことによって、国分寺・国府台遺跡の中でも、遠江国分寺跡と国分尼寺跡の間の遺跡の状況の一端を示すことができた。

参考文献

- 麻生俊、平野和男、市原寿文ほか 1961 『西貝塚』 磐田市教育委員会
- 遠江考古学研究会 1974 『遠江見性寺貝塚の研究』 磐田市教育委員会
- 磐田市教育委員会 1981 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告Ⅰ』
- 磐田市埋蔵文化財センター 1987 『鎌田・鍊鉄遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 磐田市埋蔵文化財センター 1993 『見付端城遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 磐田市埋蔵文化財センター 1994 『御殿・二之宮遺跡』 磐田市教育委員会
- 磐田市埋蔵文化財センター 1995 『中半場遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 磐田市埋蔵文化財センター 1996 『平成7年度 遠江国分寺跡周辺国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 磐田市埋蔵文化財センター 2003 『平成14年度 遠江国分寺跡周辺 国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 磐田市埋蔵文化財センター 2005 『新豊院山遺跡発掘調査報告書2 (C地点の発掘調査)』 磐田市教育委員会
- 磐田市埋蔵文化財センター 2014 『御殿・二之宮遺跡発掘調査報告書』 磐田市教育委員会
- 藤澤良祐 2005 『瀬戸・美濃と志戸呂・初山』陶磁器から見る静岡県の中世社会資料集表要旨、論考編』 菊川シンポジウム実行委員会

写真図版

写真図版 1



調査区遠景（北から、特別史跡遠江国分寺跡を望む）

写真図版 2



特別史跡遠江国分寺跡と今回調査地点との位置関係（北から）



今之浦の低地方面を望む（西から）



調査区完掘状況（北から）

写真図版 4



4次調査のトレンチ跡（ビニール敷の部分）



基本土層断面（東から）



溝跡SD01完掘状況（東から）



溝跡SD01の土層断面（東から）

写真図版 6



柱穴SP01検出状況（東から）



柱穴SP01半裁状況（東から）



柱穴SP01完掘状況（東から）



調査区西壁の柱穴SP01断面（東から）

写真図版 8



谷状の落ち込み完掘状況（北から）



出土遺物の集合写真

報 告 書 抄 錄

静岡県埋蔵文化財センター調査報告 第65集

国分寺・国府台遺跡

磐田市

令和3・4年度磐田南高等学校老朽化対策事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

令和4年11月30日発行

編集・発行 静岡県埋蔵文化財センター

〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原5300-5

TEL 054-385-5500 (代)

FAX 054-385-5506

印 刷 所 みどり美術印刷株式会社

〒410-0058 静岡県沼津市沼北町2丁目16番19号

TEL 055-921-1839 (代)

FAX 055-924-3898